

## (2) 無障害物帯形成地の植生(樹木伐採地及びチガヤ類等の移植予定地)

無障害物帯の調査位置は、マント群落・ソデ群落形成地と同様に北側、南東側、南側、西側の4ヶ所を代表として実施し、植生調査結果を表 6.3-22 に示した。また、調査地点の植生の変化を図 6.3-77～図 6.3-80 に示した。

無障害物帯は、平成22年度末に樹木の伐採が行われた後、地形が現状のまま保全されていることから表土が維持され、埋土種子からの発芽による実生株や周辺からの草本類の侵入により、平成23年度には裸地部等に緑量が増加した。平成24年5月の春季調査は、植被率80～95%、出現数28～34種であった。同年9月の調査では、植被率10～20%、出現数8～15種となり、いずれも減少する結果となったが、平成25年2月現在、緑量は回復傾向にある。なお、西側無障害物帯においては、秋季以降に盛土工が行われており、植生が消失した。工事終了後の次年度からは、緑化により、草本類が増加していくことが推測される。以下に各地点別の植生状況の変化について述べた。

北側では、樹木の伐採後の初回調査(平成23年6月)では、植被率40%であったが、3ヶ月後の調査(9月)では85%に回復していた。平成24年9月の調査では植被率10%であり、翌年1月の調査では30%まで回復していた。平成25年1月現在、草本層の高さ0.5m、植被率30%、出現種27種で、草本類のハイシロノセンダングサ、ススキ、リュウキュウバライチゴがやや優占するほか、木本類では、アカメガシワ、ホルトノキ、カキバカンコノキ、イヌビワ、シマイズセンリョウ、オオムラサキシキブ、スダジイ、ヤマグワ、モクレイシの計9種が僅かに出現した。

南東側では、樹木の伐採後の初回調査(平成23年6月)では、植被率20%であったが、3ヶ月後の調査(9月)では90%に回復していた。平成24年9月の調査では植被率10%であり、翌年1月の調査では40%まで回復していた。平成25年1月現在、草本層の高さ0.5m、植被率40%、出現種21種で、草本類のススキ、ハイシロノセンダングサ、ホシダ、コゴメスゲが優占するほか、木本類では、アカメガシワ、ギンゴウカン、タブノキ、ホルトノキ、カキバカンコノキ、シマイズセンリョウ、ホソバムクイヌビワ、スダジイ、ギイマの計9種が僅かに出現した。

南側では、樹木の伐採後の初回調査(平成23年6月)では、植被率25%であったが、3ヶ月後の調査(9月)では40%に回復していた。平成24年9月の調査では植被率20%であり、翌年1月の調査では50%まで回復した。平成25年1月現在、草本層の高さ0.8m、植被率50%、出現種22種で、草本類のススキ、ハイシロノセンダングサ、コゴメスゲ、リュウキュウチクが優占するほか、木本類では、アカメガシワ、ギンゴウカン、タブノキ、

ホルトノキ、カキバカンゴノキ、イヌビワ、オオムラサキシキブ、シロダモ、ヤマグワ、モクタチバナの計 10 種が僅かに出現した。

西側では、樹木の伐採後の初回調査(平成 23 年 6 月)では、植被率 35%であったが、3 ヶ月後の調査(9 月)では 50%に回復していた。平成 24 年 9 月の調査では植被率 20%であった。西側は 9 月の調査以降に盛土工が行われ、同年 11 月と翌年 1 月調査時ではビニールシートで覆われており、その後、緑化工事(平成 25 年 2 月)が行われている。盛土工前の調査では、草丈が 0.5m、植被率が 20%、出現種は 8 種であった。草本類のススキが優占するほか、ホシダ、ハイシロノセンダングサ、コゴメスゲ、ハウロクイチゴが出現するほか、木本類では、アカメガシワ、ギンゴウカン、ホソバムクイヌビワが僅かに出現していた。次年度以降は、緑化工事後の草本類の回復状況を把握する予定である。





図 6.3-77 無障害物の生育状況 (N-4.1 北側)

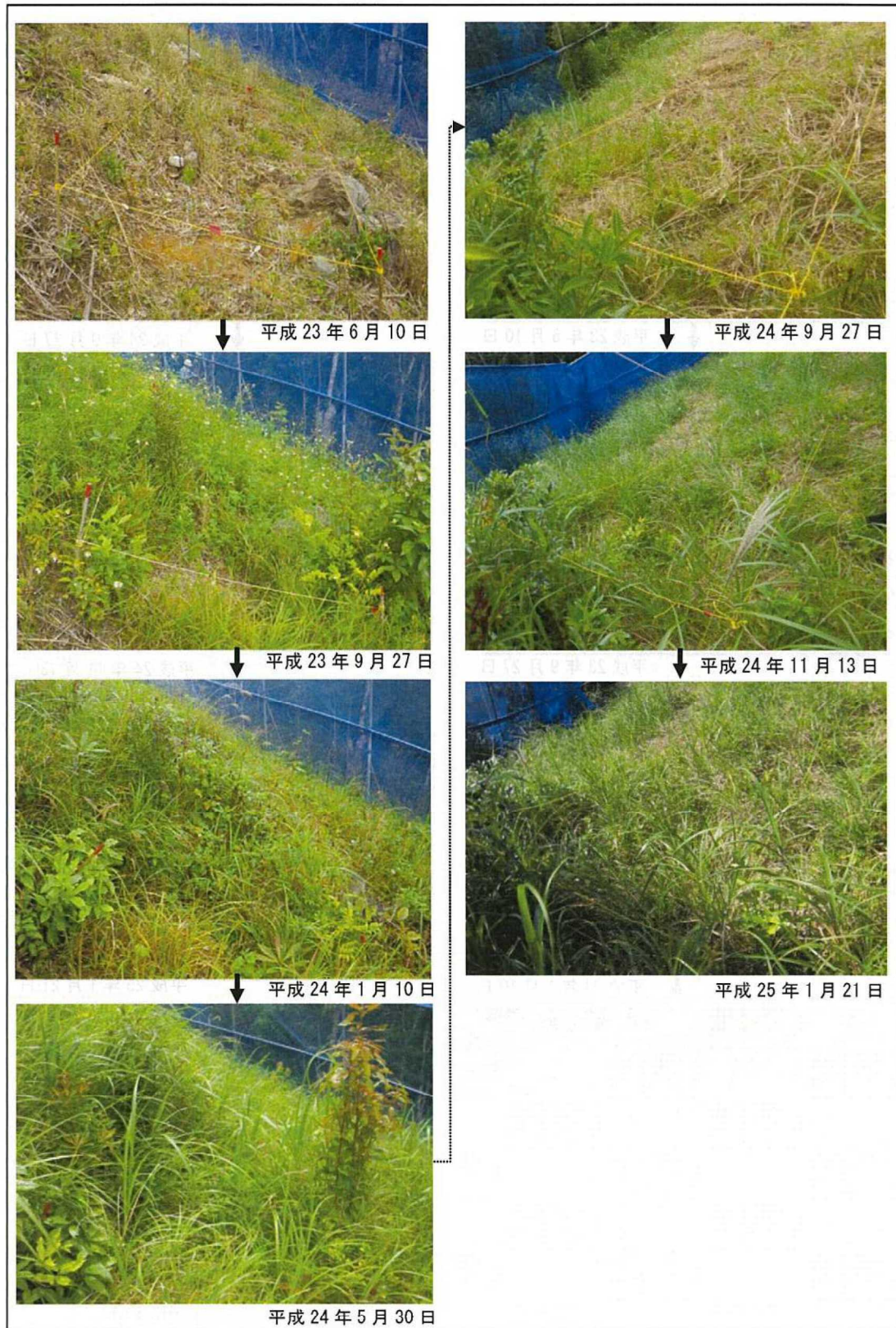


図 6.3-78 無障害物の生育状況(N-4.1 南東側)

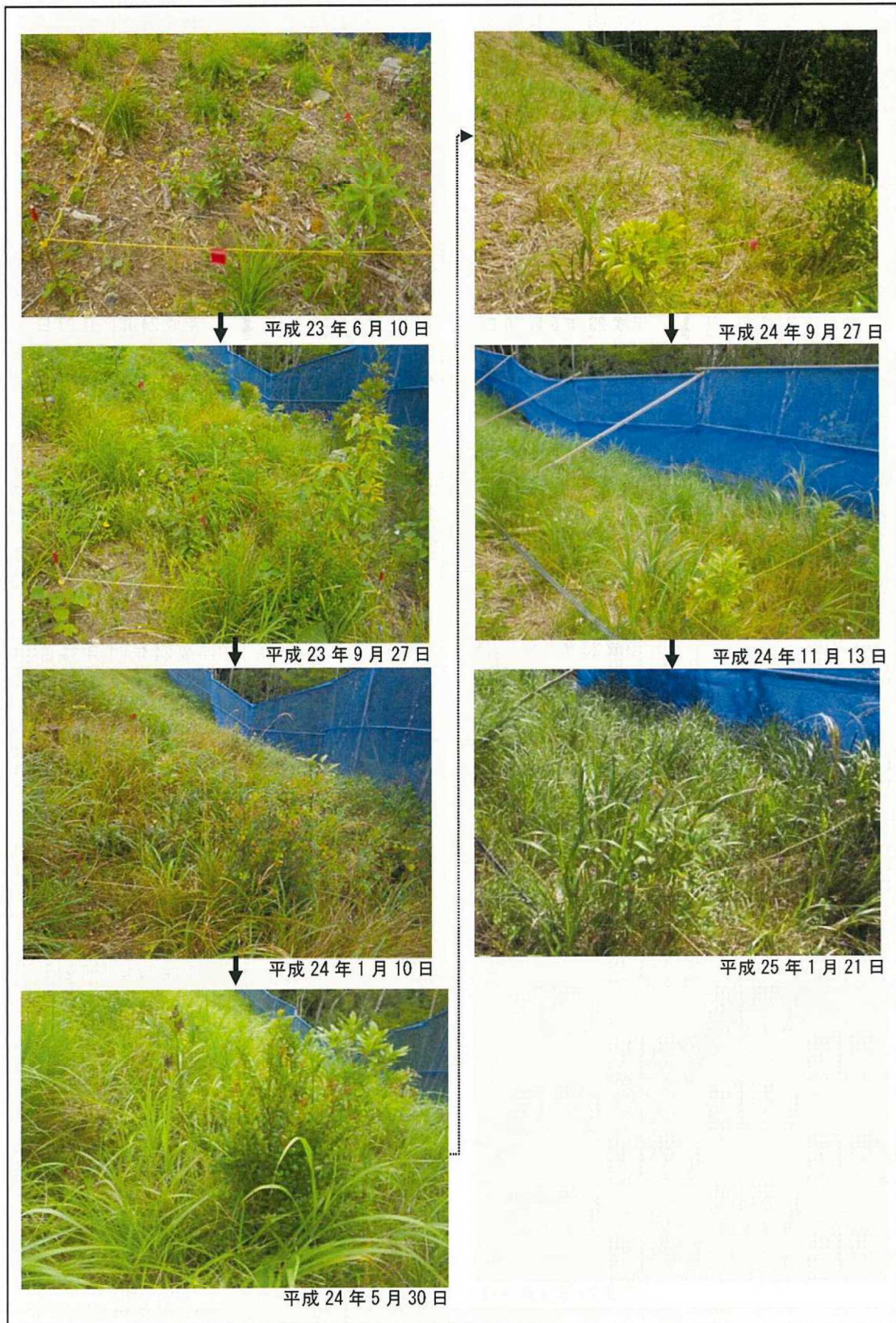


図 6.3-79 無障害物の生育状況 (N-4.1 南側)

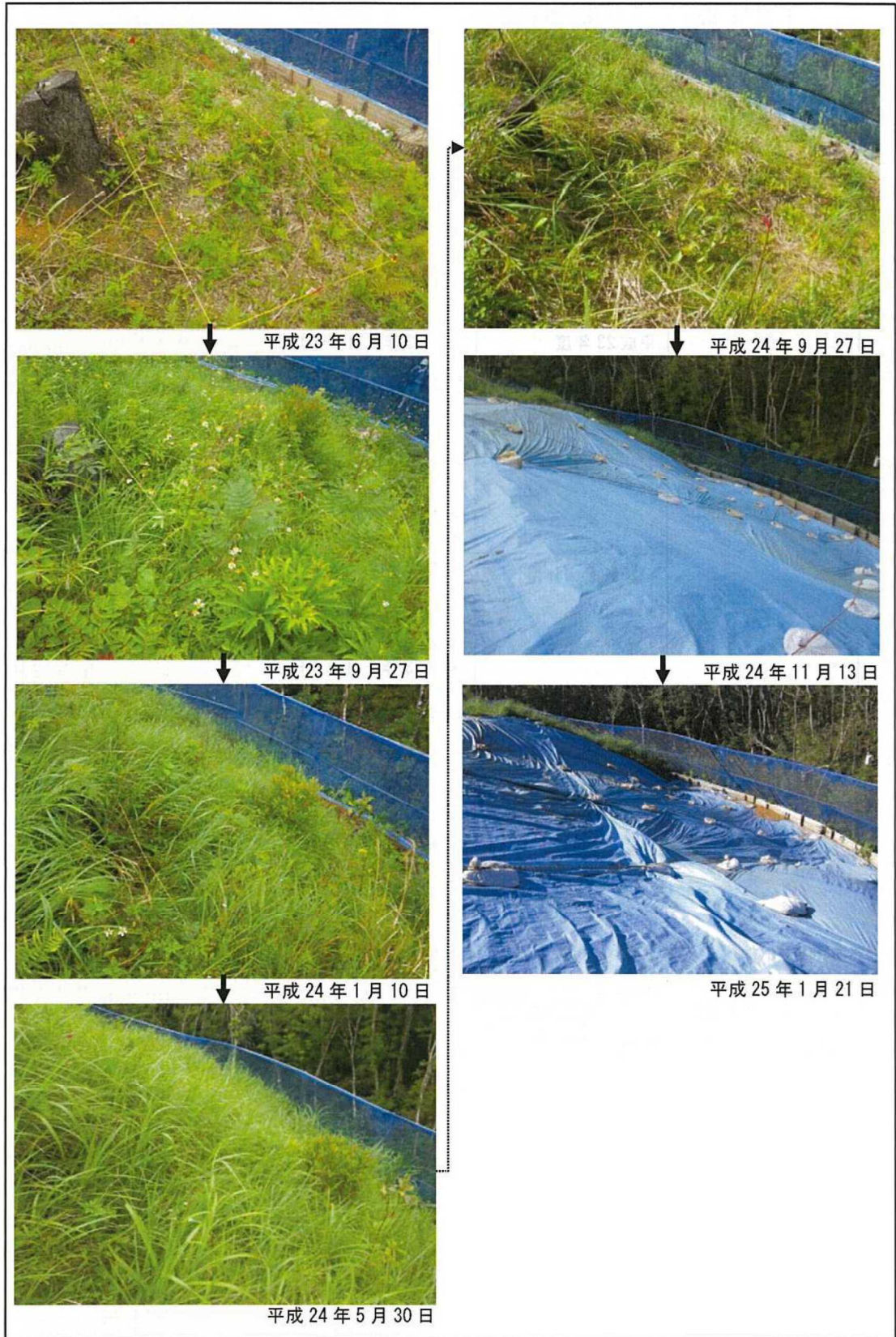


図 6.3-80 無障害物の生育状況 (N-4.1 西側)